

陸連時報 第三

2017
平成29年

7 月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

強化関連情報	246
2017年度日本グランプリシリーズ報告(強化委員会)	
2017ワールドリレーズ大会報告(強化スタッフ 堀籠佳宏、強化コーチ 荻部俊二、杉井将彦)	
日本陸連栄養士会 第4回カンファレンス報告(食育プロジェクトメンバー 松本恵)	252
日本陸連栄養セミナー2017 開催報告(食育プロジェクトメンバー 葛西真弓)	
国際関係	254
第209回国際陸上競技連盟(IAAF)カOUNシル会議 報告(会長 横川浩)	
IAAFヘルス&サイエンスコミッション会議参加報告 (理事・医事委員長 山澤文裕(IAAFヘルス&サイエンス委員会委員))	
第86回アジア陸上競技連盟(AAA)カOUNシル会議 報告(会長 横川浩)	256
第48回ジュニアオリンピック陸上競技大会 実施種目/参加標準記録	256
日本陸連ランニングクリニック「長野マラソンレース直前対策講座とランニング相談会」	257
(普及育成委員会ランニング普及部長 前河洋一)	
施設用器具委員会報告(2016-3)(施設用器具委員会)	258
大会観戦ガイド	259
陸協NEWS	260
事務局からのお知らせ	262

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものですが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

なったことにより参加記録突破者がいない中での2017シーズンであった。グランプリシリーズを迎えるにあたり、有力選手が早々と結果を出してくれた。100mの桐生選手、山縣選手、200mのサニブラウン選手、棒高跳の山本選手が海外で、国内では110Hの大室秀樹（大塚製薬）選手が13秒48を2レースで、走高跳の衛藤昂選手（AGF）が2m30と参加標準記録を突破した。グランプリシリーズでは、特にトラック種目でコンディションが恵まれず新たに突破した選手は現れなかったが、フィールド種目では棒高跳の萩田選手が5m70、三段跳の山本凌雅選手（順天堂大学）が16m87で突破した。上記の選手に加え2016年度に突破していた10000m村山紘太選手（旭化成）、混成競技中村明彦選手（スズキ浜松AC）、右代啓祐選手（スズキ浜松AC）の計11名が男子種目で標準記録を突破している。女子では5000m3名、10000m16名が突破している（突破者が多いため選手名は割愛する）。女子中距離は海外で合宿するなど強化が進んでいる。本番での活躍を期待したい。

他では、ワールドリレーに4×400mリレーが参加したが、第1走者であったウォルシュ ジュリアン選手（東洋大学）の怪我による途中棄権であった。ウォルシュ選手は、3月にオーストラリアで参加標準に迫る記録をマークしていただけない残念な結果ではあったが、早期の復帰が望まれる。

GPPでは、男子400mHで安部孝駿選手（デサント）が、今季好調の状態では49秒20の自己新記録と標準記録突破を果たしてくれた。その他のこれからの競技会で一人でも多くの参加標準記録突破者が出ることを、また2020東京オリンピックにつながる若手の台頭を期待したい。さらに、上記の選手を含む有望選手にはロンドン世界陸上で活躍を見据えたシーズンを送ってほしい。

『メダルターゲット（女子長距離）』

長距離マラソンディレクター 河野 匡

女子5000m

織田幹雄記念国際陸上女子5000mは、昨年12月にロンドン世界陸上の参加標準記録（15分22秒00）を突破している木村友香（ユニバーサルエンターテインメント）、若手の小笠原朱里（山梨学院高校）、小井戸涼（日立）が標準記録突破を狙って外国人選手に果敢に挑戦。優勝には届かなかったが、木村の切れ味は今後楽しみである。

女子10000m

兵庫リレーカーニバルはトップ選手がアメリカ遠征の関係で出場せず、松田瑞生（ダイハツ）、筒井咲帆（ヤマダ電機）、堀優花（パナソニック）、を中心にスローペースでの展開となり、勝負に徹したレースとなった。ラスト400mのスピード勝負を松田が制し、堀、筒井はロンドン世界陸上の参加標準記録（32分15秒00）に僅かに届かなかった。松田の勝負強さが印象に残った。

2戦ともにトップ選手が不在であったが、若手選手の成長がみられ日本選手権での世界陸上代表争いが楽しみである。記録を狙うにはペース設定も重要だが、最終的にはラスト勝負を制するスピード養成に取り組んでもらいたい。

『TOP8ターゲット（男子長距離）』

男子長距離オリンピック強化コーチ 綾部健二

男子5000m

織田幹雄記念国際陸上男子5000mは、ポール・タヌイ（九電工）がペースメーカーを務め、ロンドン世界陸上の参加標準記録（13分22秒60）を目標にスタート。今季好調の松枝博輝（富士通）や鑑坂哲哉（旭化成）が積極的に記録へ挑戦したが、3000m通過が8分10秒、その後も思うようにラップが上がらず4000m時点では参加標準記録の突破が厳しくなった。残り1周を5名の集団で通過した後、ラスト300mを41秒2と切れ味鋭いスパートを見せたポール・タヌイが13分30秒79で優勝。2位争いは鑑坂が13分32秒16で先着し、3位に松枝が入った。

男子10000m

兵庫リレーカーニバルは、ロンドン世界陸上の参加標準記録

（27分45秒00）を突破している村山紘太（旭化成）は欠場したものの、昨年度のランキング上位者が顔を揃え標準記録突破を期待。スタートから1周66秒～67秒の安定したペースで進み5000mを13分54秒で通過。先頭グループでレースを進めた上野裕一郎（DeNA）への期待が高まったが、7000m手前で遅れ始め、優勝争いは外国人選手3名に。ラスト800mから抜け出したジョナサン・ディク（日立物流）が27分39秒40の記録で優勝。日本人トップは粘った上野が28分07秒23で4位に入った。若手では、後半追い上げ自己記録を25秒縮める28分19秒89でゴールした栃木渡（順天堂大学）の健闘が光った。

日本グランプリシリーズを終えてロンドン世界陸上の参加標準記録を突破している選手は10000mの村山1人である。標準記録突破の可能性を持った選手は多く、今後の奮起を期待したい。

『TOP8ターゲット・ワールドチャレンジ』

TOP8ターゲット・ワールドチャレンジ 山崎一彦
コーディネーター 遠藤俊典

TOP8強化カテゴリーで今季最重要競技会である世界選手権入賞ラインに届きそうな力を見せたのは、男子三段跳の山本凌雅（順天堂大学）と男子走高跳の衛藤昂（AGF）だ。山本は、織田記念陸上で16m87の世界選手権参加標準記録を突破した。冬季シーズンから陸連合宿等では、昨年よりも技術的、体力的に昨シーズン以上に向上しており、大幅な記録向上の可能性がうかがえた。シーズン初戦であった3月のオーストラリアオープンで16m61を跳び、確かな成長の糸口をつかんでいた。今後は、日本記録の突破も期待できる試技内容であり、世界選手権の戦術および調整をうまく実行できれば、決勝進出ラインまでいける力がついているとみている。

衛藤はセイコーゴールデングランプリで今季2度目の世界選手権参加標準突破記録である2m30を跳んだ。県レベルの大会ではあるが、4月中旬にも2m30を跳んでおり、確実に力をつけている。すでに衛藤は海外合宿の経験、今シーズンは世界選手権決勝ラウンドを想定した連戦など、シミュレーションを行っており、世界選手権8位入賞の準備を着々と進めている。

男子110mHの大室秀樹（大塚製薬）は、記録会ではあるが4月に13秒48で走り、世界選手権標準記録突破した。大室は織田記念陸上でも13秒52と標準記録に迫る走りを見せていることや、中盤インターバルの改善が見られ、いつでも標準記録付近で走ることができる実力がついている。日本選手権までには世界選手権準決勝レベルである13秒3台まで持っていきたいところである。

表の世界選手権標準記録からみた5月21日までの競技者パフォーマンスで、達成率99%以上の競技者は、TOP8カテゴリーでは、男子400mW.ジュリアン、800m川元奨、3000mSC松本葵だった。ワールドチャレンジは、女子100mHの木村文子、400mHの青木沙弥佳だった。これらの競技者および種目に関しては、十分に標準記録突破の可能性が有るだろう。その他の競技者では、今季は5000m、10000mで走り強化を図っており、力をつけているリオオリンピック3000mSC日本代表の塩尻和也は、日本選手権では3000mSCにエントリーしている。3000mSCの専門的トレーニングはしていないが大幅な記録更新の可能性が有る。

その他の競技者および種目では、なんとしてでも世界選手権参加を施したいところである。リレー種目としてのTOP8である女子短距離、男女投てき種目は、ここ数年で達成率をすくなくとも97%あたりには位置したいところである。この数値は現実的には厳しい状況である。またIOCおよびIAAFの中には、参加人数縮小するための動きも見えていることから、さらに厳しくなる可能性もある。しかしながら、戦略の一環として強化委員会は、アジア選手権優勝者はIAAFのエントリールールに基づき、参加標準記録突破と同等の資格を有することになる。TOP8、ワールドチャレンジのカテゴリーは、東京オリンピックまでに多くの海外経験をして、記録だけでなく強い競技者になれるように強化を図っていることから、可能性のある競技者は、何とんでも挑戦してもらいたい。

男子TOP8 今季ランキング5位以内・日本グランプリシリーズ3位以内を満たした競技者の成績一覧（5月21日時点）
種目下の枠内は世界選手権の参加標準記録（ES）。太字で示した競技者はSB=PB。

男子400m	Rank	氏名	SB	PB	静岡GP	川崎GGP	ES/SB(%)
45.50	1	W. ジュリアン	45.62	45.35	-	-	99.7
	2	木村 和史	46.22	45.96	4	-	98.4
	3	木村 淳	46.42	46.00	-	-	98.0
	4	北川 貴理	46.55	45.52	1	-	97.7
	5	河内 光起	46.60	46.60	-	-	97.6
	6	佐藤拳太郎	46.63	45.58	2	-	97.6
	6	佐藤 風雅	46.63	46.63	3	-	97.6
男子800m	Rank	氏名	SB	PB	静岡GP	川崎GGP	ES/SB(%)
1.45.90	1	川元 奨	1.46.25	1.45.75	1	2	99.7
	2	村島 匠	1.47.46	1.47.46	2	3	98.5
	3	花村 拓人	1.49.05	1.49.05	-	6	97.1
	4	三武 潤	1.49.15	1.48.56	3	7	97.0
	5	名田 篤史	1.49.16	1.49.16	-	-	97.0
男子110mH	Rank	氏名	SB	PB	織田GP	川崎GGP	ES/SB(%)
13.48	1	大室 秀樹	13.48	13.48	1	3	100.0
	2	高山 峻野	13.67	13.58	2	-	98.6
	3	増野 元太	13.69	13.58	-	6	98.5
	3	矢澤 航	13.69	13.47	4	4	98.5
	5	金井 大旺	13.71	13.71	3	-	98.3
男子3000mSC	Rank	氏名	SB	PB	兵庫RC	川崎GGP	ES/SB(%)
8.32.00	1	松本 葵	8.36.40	8.30.49	2	5	99.1
	2	山口 浩勢	8.38.87	8.36.30	1	7	98.7
	3	石橋 安孝	8.46.50	8.43.92	4	9	97.2
	4	萩野 太成	8.49.34	8.44.39	3	11	96.7
	5	青木 涼真	8.51.38	8.51.38	5	-	96.4
男子走高跳	Rank	氏名	SB	PB	静岡GP	川崎GGP	ES/SB(%)
2.30	1	衛藤 昂	2.30	2.30	1	2	100.0
	2	赤松 諒一	2.22	2.25	-	-	96.5
	3	戸邊 直人	2.20	2.31	2	4	95.7
	4	中島 大輔	2.20	2.21	3	-	95.7
	5	藤田漢太郎	2.18	2.18	-	-	94.8
	5	大田 和宏	2.18	2.21	-	-	94.8
	5	竹村慎之介	2.18	2.18	-	-	94.8
男子走幅跳	Rank	氏名	SB	PB	織田GP	川崎GGP	ES/SB(%)
8.15	1	下野伸一郎	8.00	8.11	1	3	98.2
	2	城山正太郎	7.91	8.01	3	5	97.1
	3	橋岡 優輝	7.90	7.90	2	6	96.9
	4	大岩 雄飛	7.86	7.91	7	-	96.4
	5	小田 大樹	7.83	7.93	7	7	96.1
男子三段跳	Rank	氏名	SB	PB	織田GP	川崎GGP	ES/SB(%)
16.80	1	山本 凌雅	16.87	16.87	1	4	100.4
	2	許田 悠貴	16.21	16.21	-	-	96.5
	3	山下 航平	15.92	16.85	6	7	94.8
	4	花谷 昂	15.91	16.26	2	-	94.7
	5	角山 貴之	15.85	16.40	-	-	94.3
男子十種競技	Rank	氏名	SB	PB	Tokyo	川崎GGP	ES/SB(%)
8100	1	右代 啓祐	7787	8308	1	-	96.1
	2	中村 明彦	7780	8180	2	-	96.0
	3	森本 公人	7642	7642	3	-	94.3
	4	川崎 和也	7490	7679	4	-	92.5
	5	清水 剛士	7445	7697	5	-	91.9

男子WC 今季ランキング5位以内・日本グランプリシリーズ3位以内を満たした競技者の成績一覧（5月21日時点）
種目下の枠内は世界選手権の参加標準記録（ES）。太字で示した競技者はSB=PB。

男子1500m	Rank	氏名	SB	PB	Tokyo	川崎GGP	ES/SB(%)
3.36.00	1	館澤 亨次	3.43.16	3.43.16	-	-	96.8
	2	秦 将吾	3.44.10	3.43.51	7	-	96.4
	3	井上 弘也	3.44.65	3.44.12	4	-	96.1
	4	森田 佳祐	3.44.67	3.44.67	-	-	96.1
	5	松枝 博輝	3.45.08	3.41.74	1	-	96.0
男子砲丸投	Rank	氏名	SB	PB	兵庫RC	川崎GGP	ES/SB(%)
20.50	1	中村 太地	18.55	18.55	1	-	90.5
	2	畑瀬 聡	18.10	18.78	4	-	88.3
	3	宮内 育大	17.91	17.82	2	-	87.4
	4	森下 大地	17.88	17.54	-	-	87.2
	5	山元 隼	17.69	17.88	7	-	86.3
男子円盤投	Rank	氏名	SB	PB	兵庫RC	川崎GGP	ES/SB(%)
65.00	1	堤 雄司	58.08	60.05	3	-	89.4
	2	米沢茂友樹	57.30	57.83	2	-	88.2
	3	湯上 剛輝	56.75	57.55	1	-	87.3
	4	安保 建吾	55.10	55.79	-	-	84.8
	5	蓬田 和正	54.87	56.83	-	-	84.4
男子ハンマー投	Rank	氏名	SB	PB	織田GP	川崎GGP	ES/SB(%)
76.00	1	木村 友大	69.30	69.30	1	-	91.2
	2	植松 直紀	69.01	69.71	-	-	90.8
	3	墨 訓熙	68.25	68.25	4	-	89.8
	4	柏村 亮太	67.61	70.81	2	-	89.0
	5	赤穂 弘樹	66.42	68.96	3	-	87.4

女子TOP8 今季ランキング5位以内・日本グランプリシリーズ3位以内を満たした競技者の成績一覧（5月21日時点）
種目下の枠内は世界選手権の参加標準記録（ES）。太字で示した競技者はSB=PB。

種目	Rank	氏名	SB	PB	静岡GP	川崎GGP	ES/SB(%)
女子100m	1	福島 千里	11.44	11.21	-	6	98.4
	2	中村 水月	11.57	11.57	1	7	97.3
	3	市川 華菜	11.66	11.43	2	-	96.6
	4	世古 和	11.68	11.57	-	-	96.4
	5	青木 益未	11.70	11.68	-	-	96.2
	6	前山 美優	11.71	11.65	3	8	96.2
女子200m	1	市川 華菜	23.59	23.51	4	5	97.9
	2	福島 千里	23.60	22.88	1	-	97.9
	3	中村 水月	23.66	23.66	-	-	97.6
	4	今井沙緒里	23.91	23.68	2	7	96.6
	5	香坂いちこ	23.97	23.97	-	-	96.4
女子400m	1	青山 聖佳	53.03	52.85	1	-	98.2
	2	若田 優奈	54.53	53.79	2	-	95.5
	3	吉良 愛美	54.62	53.83	-	-	95.4
	4	青木沙弥佳	54.63	53.05	-	-	95.4
	5	川田 朱夏	54.67	54.67	3	-	95.3
女子3000mSC	1	三郷美沙希	9.50.72	9.49.85	1	-	98.5
	2	森 智香子	10.01.83	9.45.27	4	-	96.7
	3	佐藤 奈々	10.09.52	10.04.28	2	-	95.5
	4	萩田 裕衣	10.12.52	10.00.65	3	-	95.0
	5	中村真悠子	10.19.62	9.53.87	-	-	93.9

女子WC 今季ランキング5位以内・日本グランプリシリーズ3位以内を満たした競技者の成績一覧（5月21日時点）
種目下の枠内は世界選手権の参加標準記録（ES）。太字で示した競技者はSB=PB。

種目	Rank	氏名	SB	PB	静岡GP	川崎GGP	ES/SB(%)
女子800m	1	北村 夢	2:05.71	2:04.57	1	-	96.3
	2	川田 朱夏	2:05.86	2:05.03	2	-	96.1
	3	塩見 綾乃	2:06.20	2:05.36	3	-	95.9
	4	熊谷 彩音	2:06.21	2:06.21	-	-	95.9
	5	池崎 彩里	2:08.22	2:04.85	4	-	94.4
女子1500m	1	陣内 綾子	4:12.49	4:10.08	1	6	98.0
	2	木村 友香	4:15.29	4:14.35	-	8	96.9
	3	福田 有以	4:17.48	4:17.15	-	-	96.1
	4	飯野 摩那	4:18.14	4:12.41	4	9	95.9
	5	田中 希実	4:18.59	4:15.43	2	-	95.7
女子100mH	1	木村 文子	13.10	13.03	1	4	99.1
	2	青木 益未	13.27	13.27	-	7	97.8
	3	清山ちさと	13.35	13.35	-	-	97.2
	4	紫村 仁美	13.37	13.02	-	8	97.1
	5	相馬絵里子	13.40	13.22	3	-	96.9
女子400mH	1	青木沙弥佳	56.32	55.94	1	-	99.6
	2	吉良 愛美	56.96	56.63	2	-	98.5
	3	宇都宮絵莉	57.22	57.22	3	-	98.0
	4	土子田 萌	58.74	57.89	4	-	95.5
	5	斎藤 真佑	59.14	59.14	-	-	94.9
女子走高跳	1	仲野 春花	1.81	1.81	1	-	93.3
	2	秦 澄美鈴	1.78	1.82	-	-	91.8
	3	津田シェリアイ	1.76	1.81	7	-	90.7
	4	神坂 莉子	1.76	1.76	-	-	90.7
女子棒高跳	1	那須 真由	4.01	4.01	-	-	88.1
	2	我孫子 智美	4.00	4.40	1	-	87.9
	2	竜田 夏苗	4.00	4.15	2	-	87.9
	2	仲田 愛	4.00	4.23	3	-	87.9
	2	根本 智子	4.00	4.00	4	-	87.9
	2	間宮 里菜	4.00	4.00	5	-	87.9
女子走幅跳	1	甲斐 好美	6.58	6.84	-	-	97.5
	2	梶見咲智子	6.34	6.65	1	6	93.9
	3	辻本愛莉香	6.24	6.24	3	-	92.4
	4	清水 珠夏	6.13	6.48	2	7	90.8
	5	山下 友佳	6.09	6.16	7	-	90.2
5	石原 薫子	6.09	6.09	-	-	90.2	
女子三段跳	1	宮坂 楓	13.29	13.52	1	-	94.3
	2	梶見咲智子	12.95	13.34	2	-	91.8
	3	喜田 愛以	12.86	13.07	3	-	91.2
	4	森本麻里子	12.78	12.91	4	-	90.6
	5	柳川かれん	12.66	12.66	-	-	89.8
女子砲丸投	1	太田 聖矢	16.47	16.47	1	6	92.8
	2	都 葉々佳	16.24	16.24	4	5	91.5
	3	吉野 千明	15.28	15.77	2	-	86.1
	4	尾山 和華	14.88	15.11	-	-	83.8
	5	西川子カコ	14.86	14.86	7	-	83.7
女子円盤投	1	都 葉々佳	52.71	53.63	1	-	86.1
	2	中田恵莉子	50.53	53.21	2	-	82.6
	3	辻川美乃利	49.56	49.56	-	-	81.0
	4	藤森 夏美	49.36	52.97	3	-	80.7
	5	斎藤 真希	47.94	49.65	-	-	78.3
女子ハンマー投	1	渡辺 茜	65.21	66.79	2	8	91.8
	2	勝山 眸美	63.01	63.82	1	-	88.7
	3	知念 春乃	60.84	61.52	3	-	85.7
	4	関口 清乃	60.08	60.08	4	-	84.6
	5	浅田 鈴佳	59.00	59.00	7	-	83.1
女子七種競技	1	ヘンゼル恵	5659	5882	1	川崎GGP	91.3
	2	山崎 有紀	5585	5751	3	-	90.1
	3	宇都宮絵莉	5524	5668	2	-	89.1
	4	柳山 智衣	5253	5597	4	-	84.7
	5	西村 莉子	5183	5486	7	-	83.6

2017ワールドリレーズ大会報告

男子400m/4×400mR オリンピック強化スタッフ 堀籠佳宏、男子100m/200m/4×100mR オリンピック強化コーチ 菊部俊二、強化育成部オリンピック強化コーチ 杉井将彦

期 日：2017年4月22日（土）、23日（日）

開催地：パハマ/ナッソー

派遣期間：4月18日（火）～26日（水）

【派遣スケジュール】

- 4月18日 成田空港集合/出国
ジョン・F・ケネディ国際空港着
ダブルツリー・ヒルトンホテル宿泊
- 4月19日 ニューアーク・リバティ国際空港発
リンデン・ピンディング国際空港着
各自調整練習
- 4月20日 各自調整練習
- 4月21日 各自調整練習
- 4月22日 大会1日目
- 4月23日 大会2日目
- 4月24日 リンデン・ピンディング国際空港発
ニューアーク・リバティ国際空港着
ダブルツリー・ヒルトンホテル宿泊
- 4月25日 ジョン・F・ケネディ国際空港発
- 4月26日 成田空港着/解散

【派遣選手】

種目	氏名	所属
4×400mR	ウォルシュジュリアン	東洋大学
	小林 直己	セゾン情報システムズ
	田村 朋也	住友電工
	藤原 武	ユメオミライ
	堀井 浩介	住友電工
4×100mR	大嶋 健太	日本大学
	齊藤 勇真	筑波大学
	増田 拓巳	東海大学
	水久保 漱至	城西大学
	山下 潤	筑波大学

1. 大会概要

ワールドリレーズは2014年に新設され、パハマの首都ナッソーで行われるIAAF主催のリレー種目の国際大会である。リレー種目のみ実施され、男女の4×100mR、4×200mR、4×400mR、4×800mR、それに男女混合の4×400mRの合計9種目が行われた。なお、本大会において男女の4×100mRと4×400mRの上位8カ国には、今年のロンドンで開催される2017世界陸上競技選手権大会の出場権が与えられる。

2. 大会結果

本大会には、男子4×100mR及び男子4×400mRの2種目に出場した。

男子4×100mR B決勝7着 40秒31

ジュニア世代のチーム編成で参加し、予選は、増田-齊藤-山下-大嶋のオーダーで臨んだ。バトンパスは、バトン練習期間の短さなどを考慮し、ジュニア選手が慣れているオーバーハンドパスとした。結果は、予選3組3着（39秒52）であった。これは全体の12番目の記録であり、決勝へは進出できなかったが、予選の約2時間後に実施されたB決勝へ向かうことになった。なお、決勝へ進出する最低ラインは、39秒

10であった。残念ながら予選において、大嶋選手がフィニッシュの際に、右ハムストリングスの肉離れを発生するアクシデントが起こった。そのためB決勝では、4走の大嶋選手と4×400mRの補欠であった藤原選手を急きょ入れ替えてレースに臨むこととなった。B決勝の結果は、7着（40秒31）であった。なお、優勝はアメリカの38秒43であった。

男子4×400mR 予選 1走途中棄権

4×400mRには、世界陸上競技選手権大会の出場権獲得を目標に、ウォルシュ-田村-小林-堀井のオーダーで臨んだ。結果は、ウォルシュ選手がスタート後100m程走ったところで、左ハムストリングスの肉離れが発生し途中棄権となった。この種目では全体的に記録が低調で、決勝へ進出するために必要な記録（全体の8番目のタイム）は、3分5秒05であった。調整段階から日本選手は好調であり、期待も大きかっただけに、非常に悔しい結果となった。なお、決勝の優勝記録は、アメリカの3分2秒13であった。

3. 選考過程

本大会は先述したように、リレー種目の世界一を決める大会であると同時に、2017年ロンドンで開催される世界陸上競技選手権大会の予選会の位置づけでもある。世界陸上競技選手権のリレー種目への出場条件は、本大会の上位8チーム及びその8チームを除いた記録ランキング上位8チームとなる。日本の4×100mRは、昨年度のリオオリンピックにおいて37秒60という記録をマークしており、記録ランキングによる世界陸上競技選手権への参加がほぼ確実視される。また、この時期の国内トップ選手は、日本GPシリーズ等をはじめとする国内主要大会を重要視する選手が多い。これらを考慮し、本大会へ無理にトップ選手を派遣することはせず、世界の一流選手と走ることや、海外遠征といった貴重な経験をさせ、日本短距離界の幅広い育成を行うという観点からジュニア世代の選手の派遣となった。申込締切日の都合上、代表選考大会等の設定ができなため、強化委員会U20において、昨年度のランキングや競技実績などを基に、将来日本代表選手として活躍が期待されるジュニア選手5名（1名補欠）を選出した。

一方、4×400mRは、現状の持ちタイムによる世界陸上競技選手権への参加が不透明な状況であることから、本大会において上位8カ国以内に入賞し、出場権を獲得する必要があった。そのため、このシーズンインという難しい時期においても、十分に仕上がっている選手を選考することが最善であると考えられた。選考方法は、3月下旬に宮崎県で行われた短距離強化合宿内で、強化指定選手を対象とした400mのタイムトライアルを試合形式で実施した。その結果の上位5名（1名補欠）を、本大会の代表選手として選出した。

4. 大会運営

1) 生活について

選手団の宿泊は、郊外のホテルが用意された。このホテルには、本大会に出場するほとんどの選手が入っており、ホテ

ル全体が選手村となっていた。食事はビュッフェ形式で3食提供され、栄養素的にもバランスの良いメニューが並び、質と量ともに申し分のないものであった。ホテルの周辺にはお店などはほとんどないが、ホテル内には売店やフィットネスジムがあり、自由に活用することができた。海外の生活にしては特に不自由なこともなく、パフォーマンスの発揮に影響を与える要因はほとんどなかった。大会情報の入手については、宿泊ホテル内に大会本部やC.I.D (Competition Information Desk) が設置されていたため、比較的容易に最新の情報を正確に得ることができた。

2) 移動について

ホテルから試合会場までは、大会側が用意したマイクロバスに乗り、およそ20分程度であった。選手が移動を希望するたびに、ホテル近くで常時待機しているマイクロバスが運行するという仕組みで運営された。出発時間の融通がきくものであったが、大会当日には多くの選手の出発時間が重なることがあり、出発までに10分程度待たされることもあった。競技場からホテルの移動も同様に、競技場すぐ横に乗り場が設置され、常時待機しているマイクロバスが、移動を希望する時間に合わせて運行するというシステムであった。

3) 試合会場について

試合会場に用意されたウォーミングアップエリアには、出場国用のチームテントがインフィールド内とホームストレート横に設置されていた。そのため、ウォーミングアップエリアには移動するためのスペース的な余裕が十分ではなく、トラック内を自由に移動する関係者が多くみられた。また、リレーはチーム単位でウォーミングアップすることが多いこともあり、時間によってはトラックにたくさんの人が集まり、走ることができるスペースがほとんどなくなってしまうことがあった。これらのことによる混雑によって、激突寸前の光景が何度か見受けられた。安全にウォーミングアップを行うことが第一であるため、スタッフ間で声を掛け合いながら安全に留意した。なお、大会会場とウォーミングアップエリアのサーフェスは異なっていた。

大会自体は、音楽や光の演出を効果的に使用し、観客を引き付ける工夫が随所に見られ、盛り上がりのある大会となっていた。

4) 競技について

競技時間が夜間であったため、気温が徐々に低下し、時間によっては服装を変える必要があった。大会期間中は常時風がとて強く吹き、最高のパフォーマンスを発揮するには難しい環境であった。また、招集完了後からレース開始まで35分以上時間が開いているにもかかわらず、招集後は自由に運動できるスペースがほとんどないことも問題であった。さらには、試合が進むにつれて、徐々に競技開始時刻が遅れていき、選手が待機する時間も長くなっていった。

5) 広報活動について

メディアによる各国の取材と情報配信が積極的に実施されていた。選手村ホテルや競技場を中心とするさまざまな場所で、比較的フリーに取材活動が行われていた。それらはインターネットやSNSを中心に効果的に発信され、エンタテインメント性を高めることで、大会全体を盛り上げようとする努力が随所に見受けられた。

5. 今後の課題と考察

1) 競技環境について

日常とは違う環境の中で力を発揮することはやはり難しい。この時期の日本とナッソーでは、13時間の時差がある。時差調整を解消しきれていない選手や、体調不良(39度近い高熱を発症)を起こす選手もいた。また、2名の選手が肉離れを発症したことから、フライトスケジュールの問題、気温の変化や風など環境への対応、大会運営への柔軟な適応、ウォーミングアップの工夫などがより一層必要であると考えられる。本大会へは、各国ともに代表クラスの選手を派遣していたが、全体的に低調な記録であった。また、男子4×100mRでは予選で4チーム、決勝では3チームのバトンがつかないままだった。さらには、他国でもレース中に怪我をしている選手が数名見受けられた。このことから、競技環境がパフォーマンスに与えた影響が大きかったと考えられる。その中でも特に、バックストレートでは強い向かい風が常時吹いており、風による要因が大きかったのではないだろうか。

2) 派遣について

本大会の4×100mRに、ジュニア世代の選手を派遣することで将来的な戦略性をもつことができた。ジュニア世代の競技者とシニアの代表選手が一緒の時間を共有し、さまざまな経験を積んだことで、ジュニア選手の人的な成長が見受けられるような遠征となった。このようなアプローチは有効であると思われた。本大会での経験が、日本の競技レベル全体を押し上げてくれることを期待したい。4×400mRでは、シーズンインの時期ということもあり、高いパフォーマンスを発揮できる選手の見極めや、国内主要大会との兼ね合いなど、選手選考の段階で多くの問題を抱えていた。ワールドリレーズの位置づけが国際陸連や世界全体で高いものだけに、各国がそれぞれの種目において代表クラスの選手で構成されたチームを編成し、積極的に参加していたのが印象的であった。国際陸連主催の国際大会であることや、大会の趣旨をしっかりと理解・共有した上で、開催時期などさまざまな問題を抱えてはいるが、日本も各種目それぞれにできる限り参加し、代表クラスの選手を派遣していくことが望ましいかたちであるとされる。チームジャパンとして一丸となって世界で戦うという意識を陸上界全体で共有し、今後も継続して強化育成を推進していく必要があることを改めて認識した大会であった。



2017ワールドリレーズ日本代表選手

日本陸連栄養士会 第4回カンファレンス 報告

食育プロジェクトメンバー 松本 恵

平成29年4月9日(日)の午前中に、味の素ナショナルトレーニングセンターにて、日本陸連栄養士会 第4回カンファレンスを開催した。これまで、栄養士会では勉強会を開催して情報共有を図り、前回は東京オリンピック・パラリンピックに向けてスポーツ栄養として何ができるか、すべきなのかについて議論してきた。第4回目の本会では、「リオオリンピック・パラリンピックにおける栄養サポートと今後のサポートの在り方について考える」をテーマに、4名の会員からリオ五輪でのサポートの実際を報告してもらい、議論することとした。参加者は日本陸連食育プロジェクトメンバー、都道府県陸協の管理栄養士、実業団陸上部に所属する管理栄養士、日本陸連医事委員の計25名であった。

報告1：「リオに向けた栄養サポート（短距離&競歩）」

日本陸連普及育成委員 長坂聡子氏

長坂氏は文部科学省マルチサポート事業およびハイパフォーマンスサポート事業における、陸上競技短距離男子(100m、200m、400m)、競歩男子および女子(20km、50km)選手の栄養サポートをリオ五輪直前までの日本での合宿時サポートで、栄養サポートを担当した。定期的な身体計測や食事摂取状況、補食や水分摂取内容などを確認し、都度のフィードバック、アドバイスをを行い、食事メニューの調整も行ってきた。遠隔地の選手への迅速なフィードバックを可能にするための通信ツールの使用や資料の工夫などが報告された。

報告2：「日本陸連におけるリオ五輪直前合宿の食事サポート」

シダックスフードサービス株式会社 生方春奈氏

シダックスフードサービス株式会社は、リオ五輪のアメリカで行われた直前合宿における宿泊施設での食事の提供を担当した。この食事提供はオリンピックに向けて、最終調整する選手たちのために、「リラックスして、食べられたものを安全に食べられる食事と環境」を提供するために行われた。日本からは管理栄養士や調理士が派遣され、炊飯器なども持ち込まれた。ホテルの簡易キッチンでの調理・提供は非常に制限があったが、選手がおいしく、安全に食べられる工夫や衛生面の配慮、作業の効率化などの課題などが挙げられた。

報告3：「リオHPSCにおける日本の栄養・食事サポート」

国立スポーツ科学センター 石井美子氏

リオ五輪会期中、日本のアスリート・コーチ・サポートスタッフを対象にハイパフォーマンスサポートセンターが設置され、コンディショニングミールとリカバリーミールボックスが提供された。石井氏はHPSCサブリーダーとして栄養・食事サポートに携わった。センターでの食事提供は長期滞在期間中のウェイトコントロールと体調管理を可能にし、心身ともにリカバリー、リラックス、リフレッシュをはかり、安心して食事のとれる環境を提供するということが目的に、実施され、多くの選手が活用した。現地での事前調査を重ね、安全・衛生面の対策を準備し、水質調査の結果は、米飯のおいしい調理にも生かされた。

報告4：「マラソン代表選手への栄養サポート」

日本陸連栄養士会 澤野千春氏

澤野氏は実業団陸上部に所属し、管理栄養士として長距離・マラソン選手の栄養サポートを担当、勤務しているが、本会では担当選手のリオ五輪出場に伴い、事前合宿での栄養サポートについて報告いただいた。アメリカでのリオ五輪直前合宿に合流するまでの高地トレーニングでの疲労、時差調整など栄養サポートの難しさ、チームスタッフや日本陸連のスタッフ、JOCのサポートスタッフとの連携の工夫が報告された。

総合討論では、4名の管理栄養士からの報告を受け、今後の栄養サポートの在り方について、反省点や検討課題について議論された。選手のサポート体制の現状では、日常の所属先のスタッフや各種サポート事業のスタッフ、事前合宿のサポートスタッフ、現地オリンピックでのサポートスタッフなど、それぞれの立場でかかわる管理栄養士がいる。選手のコンディションやアレルギー、嗜好など、きめ細やかな対応をして、より充実した栄養サポートを実現するためには、各部門の栄養スタッフが密に連携し、一体となって取り組む工夫が必要であろう。日本陸連栄養士会では、今後、会員内の連携体制を整え、よりよい栄養サポートを構築していくことを確認した。オリンピックというビッグゲームに挑む選手のプレッシャーを肌で感じ、サポートの難しさ、栄養業務の重要性と責任を重く考えさせられる会となった。



日本陸連栄養セミナー2017 開催報告

食育プロジェクトメンバー 葛西 真弓

4月9日(日)味の素ナショナルトレーニングセンターにおいて「日本陸連栄養セミナー2017」を開催した。陸上競技選手の栄養管理を実施する管理栄養士、指導者、トレーナーら120名程度が参加した。

競技力を向上させるためには練習を十分にすることが重要であるが、そこにはスポーツ外傷・スポーツ障害がつきものである。それをいかに予防するかが競技力向上の鍵を握る。今回は「めざせ骨太アスリート」をテーマに、陸上競技に多い骨の障害と原因についての知識を深めるセミナーを実施した。

本セミナーは教育講演・パネルディスカッションの2部構成とした。

冒頭、尾縣真専務理事のご挨拶の中では、陸上選手における骨障害予防の重要性についてのお話を頂戴した。

教育講演は、鳥居俊医事委員会副委員長より「陸上選手に多い骨の障害と原因」をテーマに、骨障害発症の要因について多面的にご講演頂いた。ランニング動作は脚への負担が大きく、その繰り返し動作が要因となり疲労骨折を発症する。しかし、練習量が少なくても骨の強度が低い場合は疲労骨折が発症することもある。大学生運動部員の腰椎骨密度の比較では、他の競技と比較して陸上長距離は低い傾向であった。そのため、陸上長距離選手は疲労骨折のリスクが高いと言える。女性アスリートにおいては、無月経の選手は正常周期の選手と比較して全身骨密度が低い傾向にあった。また、初経が遅いと腰椎骨密度が低い傾向があることにも触れ、女性アスリートにおいて月経状況の管理が疲労骨折予防に不可欠であることが示された。本セミナーのテーマでもある「骨太アスリート」になるためには、発育期に骨を増やしやすい生活をするのが重要である。骨障害の予防には、骨密度を高めることが重要であり、栄養面ではカルシウム、ビタミンD、ビタミンKの摂取を意識することが大切であるとお話も頂いた。フロアからは、カルシウムの推奨量の根拠についての質問が上がり、非常に有意義なご講演となった。

次に、パネルディスカッションでは「ジュニアの障害予防について考える」をテーマに行われた。冒頭に鳥居俊医事委員会副委員長より趣旨説明と講師の紹介があった。医師、指導者、公認スポーツ栄養士と立場の異なる専門家によるセッションであった。

まず初めに、鎌田浩史医事委員より「ジュニアの障害予防」について医師の立場よりご講演頂いた。ジュニア世代特有の運動器の特徴があり、それを考慮したトレーニング開始年齢、練習内容、食事内容を実施することが重要であり、データを示しながら丁寧にご教示頂いた。骨障害の発症と関連する要因として、オーバートレーニングの自覚、練習のオフ日、練習量、食事制限、月経など様々であることが示された。

次に、パナソニック女子陸上部監督の安養寺俊隆氏より「指導者の立場から」ご講演頂いた。指導者として、「怪我をさせない、食事をしっかり食べさせる」という2本柱を重要視しており、その具体的な取り組み内容について解説頂いた。

選手の状態を把握する取り組みとしてDXA法にて腰椎骨量、体脂肪率の測定をし、選手の状況把握を行っている。また、食

事面では監督自ら調理をし、女子選手の食欲を高めるために彩りにも工夫されるなど、愛情のこもったサポートをされており、素晴らしいお話を拝聴できた。

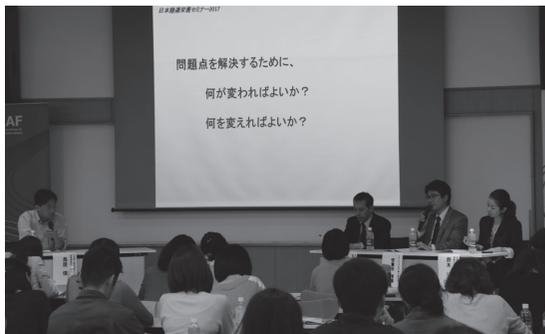
最後に、公認スポーツ栄養士の鈴木いづみ氏より「公認スポーツ栄養士の立場から骨太アスリートをつくる食事」のご講演を頂いた。骨の健康に関わる栄養素は、カルシウム以外にもたんぱく質、エネルギー摂取量、ビタミンDなど様々である。それらの骨障害予防に関連する栄養素の上手な摂取方法について詳しくご教示頂いた。最新のスポーツ栄養の国際的コンセンサスに関する紹介もあり、ビタミンD摂取目標量が1,500~2,000IU(37.5~50μg)と非常に高い目標量となっているが、日本人に適用できるかは検討が必要であることが示された。また、ジュニア世代は大人と一緒に取り組む世代であるため、その時代の保護者や指導者の言動が重要であるとお話も伺った。

最後に、パネリスト3名による総合討論と質疑応答が行われた。医師、指導者、公認スポーツ栄養士それぞれの立場から、どのようにすれば骨障害を予防できるかについて活発な討論が行われた。「骨太アスリート」になるためには、成長期の練習環境、食生活が非常に重要であり、それには指導者、保護者の理解が必要であるとのコメントも頂いた。

その後の質疑応答では現場の疑問に即した具体的な質問が多く、有意義な時間となった。

セミナーの最後に、今回のテーマである「めざせ骨太アスリート」をもとに、日本陸連が作成した「疲労骨折予防10か条」を発表した。これは、陸上選手に好発する疲労骨折を予防するために、医事委員会により作成されたものである。今後はアスリートのみならず、指導者や保護者にも活用していただくことも踏まえ、10か条の文面を参加者全員に配付・確認し、鳥居俊医事委員会副委員長より宣言を頂いた。最後に、田口素子医事委員より閉会の挨拶があり本セミナーは終了した。

本セミナーは「食育プロジェクト」の一環として開催したものである。今後も、指導者・保護者をはじめとした、選手の栄養サポートに携わる多くの方に、有益な情報提供ができるよう、プロジェクトメンバー全員で取り組んでいきたいと思っている。



第209回 国際陸上競技連盟 (IAAF) カウンシル会議報告

会長 横川 浩

第209回国際陸上競技連盟カウンシル会議(2017年4月12日/13日)がロンドンで開催されたので、国際陸上競技連盟(IAAF)のカウンシルメンバーとして参加した。同会議の概要は以下の通りである。

1. ロシア問題

- ・資格停止処分中のロシア陸上競技連盟(RUSAF)の現況について、ジェフ・ガードナー調査団委員から報告が行われ、前回のカウンシル会議(2月6日)から、改革に向けた動きに大きな進展が見られない事から、資格停止処分の解除を再び見送る事を決定した。次の問題点等が指摘された。①生体パスポートの提出拒否 ②限られたロシア・アンチ・ドーピング機構(RUSADA)への登録選手数 ③軍事配下等の閉鎖都市に滞在する選手への接近の制限 ④マクラーレン・レポートの真偽に対する不十分は報告 ⑤内部告発者(Andrey Dmitriev氏)に対する、ロシア国内での非難継続と不当な扱い ⑥RUSADAのエレナ・イシバエワ管理委員長の継続した、批判的な態度。
- ・RUSAFは、IAAF規則22.1Aに従って国際大会に参加する資格を認められたロシア人選手は、中立の立場ではなく、ロシア代表として参加を認められるべきであると主張したが、IAAFはロシアの改革を達成するには、個人資格での出場権利を認める事が妥当であると判断した。

2. 2020年東京オリンピック競技種目

東京オリンピックに向けて、IOCは各競技団体に対して実施種目の見直しを提言し、その際の重要な要素として、男女平等を挙げた。IAAFに対しては、50km競歩が男子のみの実施種目である事、調査統計が示す同種目への関心が低迷している事、過去のメダリストによるドーピング違反が相次いでいる事等を理由に、除外対象として提案された。これに対し、カウンシルメンバーは、アスリートファーストを最重視した上で、この提案が薄弱な議論に基づくIOCの一方的な要求であり、且つ、IAAF内で十分な議論がなされてない中での決定は享受出来ないとして、2020については、前回大会同様の種目を実施する事でIOCに回答する事を決議した。しかし、オリンピックのナンバー1スポーツであり続ける為に、2024年以降の実施種目や改革案について検討する必要性は共通認識であり、継続審議する事で合意した。

3. IAAF憲章の見直し

本年8月にロンドンで開催される総会に向け、各加盟団体から、2017/2019 IAAF憲章への改定案が提示され、各提案に対するカウンシルメンバーの意見集約が行われた。改定案は別途各加盟団体に伝達される。

4. IAAF規則・IAAF規定の見直し

- ・2017年4月3日のインテグリティユニットの運用開始に先立ち、4月1日に電話会議が行われ、関連する次のルールが承認された。①インテグリティユニット規則 ②行動規範 ③アンチ・ドーピング規則 ④ドーピング以外の報告・調査・告発規則 ⑤懲戒審判規則
- ・各加盟団体、IAAF技術委員会等から、IAAF競技規則・規定改定の提案がされた。各提案に対してカウンシルメンバーの見解を纏め、これが、8月の総会で審議される。

5. IAAFロードレース・ラベリング規定の見直し

現状では、最上位であるゴールドラベルの大会が最も多く、ブロンズラベルの大会が少ないという逆ピラミッド型の構造になっている。ラベリング制度の価値を維持するためには、ピラミッド型に修正していく事が必要で、2018年から、各大会の新たな評価システムの導入を目指す。

- ・各大会による分担金制度を導入し、それを主にアンチ・ドーピング活動費用関連に充てる。分担金は、ゴールド大会が20,000ドル、シルバー大会が10,000ドル、ブロンズ大会が5,000ドルを想定しており、その収入は大会での検査費用等に充当されるので、各大会によるドーピング検査費用の負担はなくなる。詳細は、本年7月頃に配信される予定。

6. インテグリティユニット

同ユニットのボードメンバーの承認が行われ、委員長にはWADAの前事務総長のDavid Howman氏が任命された。Disciplinary Tribunal(懲戒審判所)の委員長にはIAAF倫理委員会委員長を務めていたMachael Beloff氏が、審査委員会委員長にはAkere Muna氏が就任した。

7. コミッションの活動報告

- ・アスリート委員会は、同委員の選考方法の変更について提案を行い、ロンドン世界選手権の際に行われる選挙から適用される事が承認された。アスリート委員の更なる活発な活動を目指し、候補者のビジョンを明確化し、積極的な貢献が可能な候補者を選べる選考方法が導入される。
- ・コンペティション委員会の提案により、賞金システムの見直しを目的としたワーキンググループを設置する事が承認され、今後、選手の現況やニーズも鑑みて、賞金体系の包括的な検討を実施する。
- ・IAAF組織改革に伴い、医事アンチ・ドーピングコミッションが解散し、医事部門のみを取り扱うヘルス&サイエンスコミッションに変更する事が承認された。

8. ワーキンググループの活動報告

- ・国籍変更問題のワーキンググループは、カウンシル会議に先立ち会議を行い、その内容について、委員長である筆者が報告を行った。現在ワーキンググループでは、現状分析やケーススタディを行っているが、多種多様な要素が複雑に絡み合う問題である事から、更に検証を進め、12月開催予定のカウンシル会議までに最終提案を決定する。改正案が決定するまでは、IAAF規則5.2(b)、5.4(d)、5.4(e)の無効化、国籍変更申請の凍結は継続される。
- ・年齢詐称問題のワーキンググループは、年齢詐称を科学的な方法等で特定する事は現状困難と判断し、IAAF規則の徹底により、この問題に取り組む事とした。疑義のある選手に関する情報を特定し、違反が認められた場合には、選手本人だけでなく、所属陸連の責任処分も課題とする。
- ・記録の信憑性問題のワーキンググループは、競技会のインテグリティを守るために、IAAF規則149.2(a)-(d)の徹底と同時に、恒久施設に於けるIAAF公認の取得の必要性について提案を行い、その方針が承認された。今後は、選手の記録の統計的なモニタリングも検討し、信憑性が疑われる記録については、告発出来るシステムも構築する。

9. 今後のIAAF主催競技会

- ・世界陸上競技選手権(ロンドン)タイムテーブルの一部変更を承認し、200m・400mの両種目参加を容易にした。
- ・2018年開催の、世界ハーフマラソン(バレンシア)のタイムテーブルと、世界室内選手権(バーミンガム)のタイムテーブル・参加標準記録を承認した。
- ・世界競歩チーム選手権(中国・太倉)の開催日程を、2018年5月5日・6日に決定した。
- ・世界クロスカントリー選手権(デンマーク・オーフス)の開催日程を、2019年3月30日に決定した。
- ・世界陸上競技選手権大会(米国・ユージン)の開催日程を、2021年8月6日~15日に決定した。

IAAFヘルス&サイエンスコミッション会議参加報告

理事・医事委員長 山澤文裕 (IAAFヘルス&サイエンス委員会委員)

前会長やロシア陸連のスキャンダルに見舞われた国際陸連 (IAAF) は、セバスチャン・コー会長のもとで大きな改革を行っている。その1つが医事アンチ・ドーピング部 (MADD) の発展的解体である。ドーピング隠蔽疑惑は、世界のスポーツ界、アンチ・ドーピング界から一目置かれていたMADDの信頼性を一気に陥れた。コー会長はMADDを解体し、アンチ・ドーピング部門をIAAF事務局から切り離し、新設したアスレティクス インテグリティ ユニット (AIU) に移した。AIUはIAAF事務局から独立し、IAAF会長の指示を受けない組織である。AIUはドーピングコントロール以外にも、倫理問題、加盟団体のコンプライアンス、アスリートの年齢詐称問題なども取り扱う組織となり、世界アンチ・ドーピング機構 (WADA) 前事務総長デビッド・ハウマンが初代委員長に就任した。一方、医事部門はIAAF事務局に残り、その活動を支援するコミッションとしてヘルス&サイエンスコミッション (HSC) が設けられた。すなわち、MADDの解体に伴い、これまでの医事アンチ・ドーピングコミッション (MADC) が解散し、医事部門のみを取り扱うHSCとして生まれ変わった。2017年3月にHSCと名称が付けられた理由は、IAAFはトップアスリートのパフォーマンスのみではなく、一般市民ランナーの健康にも寄与する組織として発展していくことを念頭に置いたためである。

筆者は2004年よりIAAF MADC委員を委嘱され、IAAF本部のあるモナコにおいて1年に1度のコミッション会議に参加していた。しかし、2016年はIAAFのスキャンダルのためにコミッション会議は開催されないままであった。今般、設立したばかりのIAAF HSCの委員としてIAAFカウンスルより任命され、アジア地区代表としての席を引き続き確保することができた。IAAFのような巨大組織におけるコミッション委員は、陸上競技のみならず世界のスポーツ界における様々な情報にいち早く触れることができ、また東京2020に向けてIAAFとの直接交渉ができる立場でもあり、重要なポジションと考えている。

今般、2017年3月31日 (金) 及び4月1日 (土) 2日間にわたり開催された初回のHSC会議に参加した。会議内容の詳細についての報告は控えさせていただくが、HSCの委員構成、任務、プロジェクトなどについて紹介する。

HSCの委員構成：各エリアから少なくとも1名の委員が任命され、合計で9名から12名の範囲で委員会は構成されることとなっている。委員はIAAFカウンスル (理事会) で任命され、任期は4年である。HSC初回のメンバーは、アフリカ地区として任命されたハロルド・アダムス (南アフリカ) がHSC委員長となった。他に、南米カリブ地区 ウレン・ブレイク (ジャマイカ)、ヨーロッパ地区

ドロ・ブランコ (ポルトガル)、フレデリック・デビシ (フランス)、ロスウイタ・ゲルデス・キューン (ドイツ)、アルマ・カジェニネ (リトアニア)、ジャン・コワルスキ (スウェーデン)、北米地区 アマデオ・マソン (アメリカ)、そしてアジア地区 山澤文裕 であり、総勢で9名がHSC委員に任命された。ヨーロッパから全委員の半数以上の5名の委員が任命されているが、ヨーロッパ偏重の傾向はMADC時代から変わっていない。9名の委員のうち、MADCからの継続は、アダムス、ブランコ、カジェニネそして山澤の4名で、他の5名は新任であり、新旧ほぼ同数で均整がとれている。ブレイクはジャマイカ陸連会長、ゲルデス・キューンはロサンゼルスオリンピックに出場したオリンピックである。IAAF事務局側からは、IAAF医事顧問であるステファン・バーモンが出席した。バーモンは一時IAAF MADC委員であったが、委員を降り、事務局医事部門代表としてHSCに参加し、会議を主導した。

HSCの任務：以前のMADCでは、医事とアンチ・ドーピングの両方を取り扱ったが、アンチ・ドーピングに関してはAIUが一手に引き受けることとなるため、HSCは医事関連のみを任務としている。様々な任務のなかでも、何とんでもアスリート、一般市民ランナーの健康を守ることを主眼に置いている。具体的には、1) 陸上競技における医学的事項もしくは科学的事項に関する方針、声明に関すること、2) カウンスルに対する医学的アドバイスもしくは科学的アドバイスに関すること、3) 国際競技大会における医療サービス組織の構築に関すること、4) 一般大衆参加大会において陸上競技を通じた健康増進に関すること、5) 陸上競技に関するスポーツ医学的問題に関すること、6) 一般の医師に対してスポーツ医学情報を提供すること、7) 競技者およびサポートスタッフのスポーツ医学に関するレベルアップに関すること、などを行う。これまで作成してきたマニュアルや指針などについても、高いエビデンスに基づく記載へと改訂がなされると思われる。

HSCのプロジェクト：これまでMADCで行ってきた重要なプロジェクトである、競技会における障害疾病調査、アスリートに対する定期健康診断の受診勧奨、スポーツ栄養、高アンドロゲン女性競技者対応などは継続し、今後はIOCと共同作業によるトランスジェンダー対応、IAAF地域発展センターやハイパフォーマンスセンターでの医学教育の実施、市民参加型マラソン大会における医療体制の充実、などを行うこととしている。

最後に、IAAF HSC委員として、陸上競技関係の皆様への医事活動に対する、更なるご理解とご協力をお願いいたします。

第86回アジア陸上競技連盟 (AAA) カウンシル会議報告

会長 横川 浩

2017年3月30日に第86回アジア陸上競技連盟 (AAA) のカウンシル会議がタイ・バンコクで開催されたので、国際陸上競技連盟 (IAAF) のカウンシルメンバーとして参加した。タイ政府はスポーツの普及振興、特に陸上の発展に非常に熱心で、本会議の冒頭にはタイ王国副首相がご臨席された。カウンシル会議概要は以下の通りである。

1. Dahlan AAA会長ご挨拶

IAAFの臨時総会が2016年12月に開催され、IAAFガバナンス体制改革案が承認された。陸上界が直面する危機的な状況を乗り切るためには、全世界が一枚岩になって、結束する事が不可欠となるが、特にアジアがその中で場趨を握る存在であると強調された。臨時総会では無効票を投じたアジアの国があったが、それは、改革への反対の意思表示ではなく、妥協を容認しないで、更なる説明を要求した姿勢に過ぎないと説明された。今後はアジアは、確固たる戦略プランに基づき、活動を推進し、国際社会に貢献していく事が確認された。

2. AAA組織体制改革

- ・現在、AAAでは、モーリス・ニコラス氏が事務局長 (General Secretary) と財務官 (Treasurer) を兼任しているが、2019年の選挙に向けて、その2つの役職の選出方法について、議論が交わされた。その結果、事務局長はAAA事務局のスタッフとして、指名で選出する事とした。事務局長の役割については大きな変更は行わず、事務局運営を指揮する事が職務となるが、投票権は持たない事になる。事務局長の指名にあたっては、透明性を保つ事に留意して進める事とした。財務官は総会選挙で選出し、カウンシルメンバーとして、投票権を持つ事になる。
- ・AAAの副会長ポストは5議席あるが、アジアの5つのエリアから各々代表を選出し、AAA副会長とする案が出された。この提案の背景には、アジア5地域の意見をバランス良くAAA活動に取り入れたいという狙

いがあったが、現状では各エリアの国数が違うといった反対意見も出され、今後の検討課題とする事とした。

- ・AAAカウンシルメンバーの任期について、議論が交わされた。在職期間や年齢によって制限を設ければ、各個人の経験や実績が正当に評価されない、という意見が出た一方、定期的に新しい人材を入れる事によって、組織の活性化や若返りが出来るという考えも出た。IAAFでは、基本的には1期4年で最大3期までとした事もあり、AAAは今後検討を継続するが、今会議での決定を見送った。

3. AAA戦略

AAA戦略案が提案され、その内容について、継続審議していく事で合意した。AAA戦略に加え、普及計画や財政計画も明確にしていく事が重要であるという認識を共有した。アジア・マラソン・リーグに関する、中国のInfront Sports & Mediaとの契約内容は精査し、収入の使途については、分配比率を明確化し、検討していく必要性が指摘された。アジアの競技会カレンダー見直しも協議され、今後の最も重要な継続審議課題として、アジア陸上競技選手権の開催年が挙げられた。

4. AAA大会予定

- ・インド陸連より、2017年アジア陸上競技選手権の開催都市と日程について、変更の申し出があった。開催地をランチャーからバナーシュワルへ、日程は総会を7月5日開催、大会を7月6日から9日にする事で合意した。
- ・2018年のアジア室内選手権、アジアグランプリシリーズ、アジアクロスカントリー選手権の開催場所については、決定に至っていないが、現状では、アジアグランプリの第3戦をフィリピン、アジアクロカンを中国で開催する事で調整が進んでいる。
- 5. 上記に加え、各コミッションと各AAA大会の実施報告、準備状況の報告が行われた。

第48回 ジュニアオリンピック陸上競技大会 実施種目と参加標準記録

期日：2017年10月27日～10月29日 (横浜：日産スタジアム)

区分	男 子		女 子	
	種 目	記録	種 目	記録
A (中学3年)	100m	10.90	100m	12.30
	200m	22.40	200m	25.40
	3000m	8:46.00	3000m	9:51.00
	110mH (0.914m/9.14m)	14.40	100mH (0.762m/8.00m)	14.30
	★ (0.991m/9.14m)	15.10	★ (0.762m/8.50m)	14.60
	走高跳	1m91	走高跳	1m63
B (中学2年)	砲丸投 (5.000kg)	14m50	砲丸投 (2.721kg)	13m80
			★ (4.000kg)	11m20
	100m	11.20	100m	12.50
	1500m	4:10.00	1500m	4:36.00
	110mH (0.914m/9.14m)	15.30	100mH (0.762m/8.00m)	14.90
C (中学1年)	走幅跳	6m35	走幅跳	5m35
	砲丸投★ (4.000kg)	14m50	砲丸投 (2.721kg)	12m45
	(5.000kg)	13m00		
	100m	11.80	100m	12.80
	1500m	4:25.00	800m	2:18.50
共通	走幅跳	5m80	走幅跳	5m00
	円盤投 (1.500kg)	39m00	円盤投 (1.000kg)	34m00
	ジャベリックスロー (0.300kg)	1名	ジャベリックスロー (0.300kg)	1名
	4×100mR	1チーム	4×100mR	1チーム

★は本競技会で採用する規格

*学年と生まれ年が相違している場合は生まれ年に該当する区分にエントリーすること *電気計時とする。(手動計時は認めない)

参加資格

2017年度本連盟登録者で下記 (1)～(4)のいずれかに該当すること。

- (1) 2017年4月1日～9月11日の間に上記の標準記録に到達した者。
- (2) 標準記録の突破に関係なく、それぞれの種目ごとに各都道府県から代表選手1名は出場できる。
(同一区分の同一種目に2名以上出場する場合は、すべての競技者が標準記録を突破していること。)
- (3) リレーは、各都道府県から1選抜チームのみ、参加できる。
- (4) 参加標準記録を設けない種目について

男女・共通 ジャベリックスロー 各都道府県から1名のみ、参加できる。

参加制限 1人1種目とする。ただし、リレーは除く。

日本陸連ランニングクリニック 市民ランナーのための「長野マラソンレース直前対策講座とランニング相談会」

普及育成委員会ランニング普及部長 前河 洋一

第19回長野マラソンが4月16日(日)に開催された。レース前日の15日、出場するランナーの受付会場となるビッグハットにおいて、今年も日本陸連主催・市民ランナーのための長野マラソンレース直前対策講座とランニング相談会を実施した。

最近の都市型マラソンの中では比較的厳しい制限時間5時間の大会であり、完走を目指す初心者ランナーや、記録向上を目的とした競技者志向まで、多くのランナーで会場が溢れていた。申込み開始早々に定員オーバーとなり、スタートラインに立つことが難しい人気のレースであるが、参加者の中にはりピーターも多く見受けられた。

クリニックの内容は、自由参加のトークショーとテーマを選択して参加するグループ相談会の2部構成とし、午前と午後の2回、同じ内容を実施した。トークショーは、私がファシリテーターとなり、浅井えり子氏、大島めぐみ氏をゲスト講師に、マラソンに関する基本的な知識や準備、レース前日の過ごし方など、長野マラソンの魅力を交えて参加者が気楽に聞けるような情報提供とした。特に当日のレースの攻略方法や注意点等はまさに直前対策としてランナーの皆様の興味をひいていた。また、グループ相談会はランナーのニーズに合うようにテーマを絞って、質疑応答形式とし、日頃の疑問点や不安材料の質問に対して、講師が懇切丁寧なアドバイスを行った。トークショーには200脚ほどの椅子を準備していたが、立ち見も多く会場が埋め尽くされていた。



グループ相談会は7つのテーマに分けて行われた。基本情報を提供し、参加者からの質問に基づいて進行したが、全体的にランナーのレベルが高い長野マラソンの参加者だけあって、熱心な方が多く、講師陣も時間を延長して行っていた。大会と連動したランニングクリニックは他の大会でも行われているが、テーマ別で且つ参加者との対話形式で行われるケースは少なく、今後他の大会でも展開をしていきたい。



最後に、事前準備や当日の受付など、あらゆる面でご協力いただきました長野県陸上競技協会の先生方と関係各位に改めて感謝申し上げます。

内容と担当講師は以下の通りである。

- 1部：トークショー「元オリンピックランナーによるレース対策と直前アドバイス」
浅井えり子「長野マラソンの魅力とレース直前の過ごし方」
大島めぐみ「マラソンのレーステクニックについて」
(司会) 前河洋一
- 2部：テーマ別グループ相談会 (30分の内容を2回実施)
 - 1) ランニングフォームのアドバイス (園原健弘)
 - 2) 初級レベルのトレーニングアドバイス (市河麻由美)
 - 3) 中級レベルのトレーニングアドバイス (大島めぐみ)
 - 4) 上級レベルのトレーニングアドバイス (渋谷俊浩)
 - 5) ランナーの食事と栄養に関するアドバイス(大畑好美)
 - 6) ランナーの健康や体調管理と内科的トラブル対処法 (岡野裕)
 - 7) ランニング障害の予防と対処法 (小嵐正治)

講演プロフィール	
浅井 えり子	元オリンピック選手、日本代表選手。1992年バルセロナオリンピック、2000年シドニーオリンピックに出場。2004年アテネオリンピックでは、女子マラソンで銅メダルを獲得。現在は、ランニング指導者として活動中。
園原 健弘	元日本代表選手。1992年バルセロナオリンピックに出場。現在は、ランニング指導者として活動中。
市河 麻由美	元日本代表選手。1992年バルセロナオリンピックに出場。現在は、ランニング指導者として活動中。
大島 めぐみ	元日本代表選手。1992年バルセロナオリンピックに出場。現在は、ランニング指導者として活動中。
渋谷 俊浩	元日本代表選手。1992年バルセロナオリンピックに出場。現在は、ランニング指導者として活動中。
大畑 好美	元日本代表選手。1992年バルセロナオリンピックに出場。現在は、ランニング指導者として活動中。
岡野 裕	元日本代表選手。1992年バルセロナオリンピックに出場。現在は、ランニング指導者として活動中。
小嵐 正治	元日本代表選手。1992年バルセロナオリンピックに出場。現在は、ランニング指導者として活動中。
前河 洋一	元日本代表選手。1992年バルセロナオリンピックに出場。現在は、ランニング指導者として活動中。

【訂正版】2016数字で見る陸上競技 Vol.4 都道府県別高校生陸上競技部員割合

事務局

2016数字で見る陸上競技、4回目の今回は、高校生の陸上競技部員の全高校生生徒数における割合を都道府県別にご紹介します。2015年度の日本陸上競技連盟における高校生登録者を、同年度の高校生生徒数（文部科学省調べ）で割ったものです。

【算出方法】 割合（％）＝（高校生陸連登録者数）÷（高校生全生徒数）×100

都道府県名	2015年度高校生陸連登録者数	前年比	前年数	2015年度高校生全生徒数	2015年度割合	2014年度高校生全生徒数	2014年度割合
北海道	4,326	-124	4,450	131,682	3.3%	134,616	3.3%
青森	1,522	-103	1,625	37,409	4.1%	38,266	4.2%
岩手	1,764	16	1,748	35,313	5.0%	35,879	4.9%
宮城	2,603	50	2,553	61,366	4.2%	61,583	4.1%
秋田	1,425	-59	1,484	26,299	5.4%	26,926	5.5%
山形	1,646	10	1,636	31,225	5.3%	31,945	5.1%
福島	2,062	-55	2,117	53,874	3.8%	54,952	3.9%
茨城	2,371	33	2,338	79,077	3.0%	79,089	3.0%
栃木	1,465	-42	1,507	54,035	2.7%	54,446	2.8%
群馬	1,726	8	1,718	53,016	3.3%	53,421	3.2%
埼玉	5,392	-183	5,575	178,227	3.0%	178,511	3.1%
千葉	5,764	37	5,727	152,419	3.8%	152,666	3.8%
東京	8,542	107	8,435	316,933	2.7%	316,058	2.7%
神奈川	6,150	116	6,034	206,616	3.0%	205,223	2.9%
新潟	2,599	-39	2,638	60,453	4.3%	61,504	4.3%
富山	1,159	-44	1,203	28,671	4.0%	28,857	4.2%
石川	1,275	-40	1,315	32,402	3.9%	32,306	4.1%
福井	777	-21	798	23,026	3.4%	23,235	3.4%
山梨	954	-42	996	26,072	3.7%	26,346	3.8%
長野	1,716	-48	1,764	58,983	2.9%	59,093	3.0%
岐阜	2,174	-77	2,251	56,451	3.9%	56,681	4.0%
静岡	4,173	26	4,147	100,536	4.2%	100,819	4.1%
愛知	7,720	66	7,654	200,277	3.9%	198,951	3.8%
三重	2,215	-76	2,291	50,147	4.4%	50,583	4.5%
滋賀	1,637	-35	1,672	39,755	4.1%	39,510	4.2%
京都	2,471	-30	2,501	72,131	3.4%	72,147	3.5%
大阪	6,679	118	6,561	236,700	2.8%	236,529	2.8%
兵庫	5,892	65	5,827	145,323	4.1%	145,112	4.0%
奈良	1,199	-16	1,215	37,455	3.2%	37,537	3.2%
和歌山	861	10	851	28,053	3.1%	28,523	3.0%
鳥取	779	24	755	15,369	5.1%	15,500	4.9%
島根	816	-39	855	18,714	4.4%	18,889	4.5%
岡山	1,611	8	1,603	54,907	2.9%	55,306	2.9%
広島	2,851	-56	2,907	73,624	3.9%	74,445	3.9%
山口	1,723	-35	1,758	35,131	4.9%	35,340	5.0%
徳島	535	-20	555	19,743	2.7%	19,983	2.8%
香川	919	3	916	26,762	3.4%	26,472	3.5%
愛媛	1,437	8	1,429	35,543	4.0%	36,071	4.0%
高知	538	-15	553	19,492	2.8%	19,831	2.8%
福岡	4,286	-27	4,313	132,304	3.2%	133,038	3.2%
佐賀	1,238	-17	1,255	25,470	4.9%	25,711	4.9%
長崎	2,023	35	1,988	40,330	5.0%	40,868	4.9%
熊本	1,659	39	1,620	49,037	3.4%	49,680	3.3%
大分	1,094	72	1,022	32,226	3.4%	32,787	3.1%
宮崎	1,007	-6	1,013	32,598	3.1%	33,345	3.0%
鹿児島	1,486	-21	1,507	47,126	3.2%	48,026	3.1%
沖縄	854	-43	897	46,812	1.8%	47,413	1.9%
合計	115,115	-462	115,577	3,319,114	3.5%	3,334,019	3.5%

※高校生全生徒数は、文部科学省ホームページ統計情報（http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/main_b8.htm）内、学校基本調査の高等学校＞全日制・定時制 学年別生徒数 からの抜粋

※2016年4月号に掲載しました「2016数字で見る陸上競技 Vol.4 都道府県別高校生陸上競技部員割合」に誤りがありましたので、訂正版を掲載しました。お詫び申し上げます。

大会観戦ガイド

2017.5.31 時点

第101回日本陸上競技選手権大会 兼第16回世界陸上競技選手権大会 (2017 / ロンドン) 代表選手選考競技会

▼期日：2017年6月23日（金）～6月25日（日）

▼場所：ヤンマースタジアム長居
大阪市東住吉区长居公園1-1

▼アクセス：

地下鉄御堂筋線「長居」下車。1番出口より500m（徒歩6分）

JR阪和線「鶴ヶ丘」下車。東出口より550m（徒歩6分）

JR阪和線「長居」下車。東出口より650m（徒歩7分）

▼競技実施日・競技時間

* エントリー数により予選・準決勝はなくなる場合があるが、決勝実施日に変更はない。

[第1日目 6月23日（金）]

13時00分開始予定 ～ 20時40分終了予定

男子：100m予選・準決勝／400m予選／800m予選
／1500m予選／10000m決勝／400mH予選／棒高
跳決勝／ハンマー投決勝

女子：100m予選／400m予選／1500m予選／
10000m決勝／走高跳決勝／走幅跳決勝／ハンマー投
決勝

[第2日目 6月24日（土）]

14時00分開始予定 ～ 20時40分終了予定

男子：100m決勝／200m予選／400m決勝／800m
決勝／1500m決勝／110mH予選・準決勝／400mH
決勝 走幅跳決勝／やり投決勝

女子：100m決勝／200m予選／400m決勝／800m
予選／1500m決勝／100mH予選・準決勝／400mH
予選／3000m障害物決勝／棒高跳決勝／三段跳決勝
／砲丸投決勝／やり投決勝

[第3日目 6月25日（日）]

13時00分開始予定 ～ 18時00分終了予定

男子：200m決勝／5000m決勝／110mH決勝／
3000m障害物決勝／走高跳決勝／三段跳決勝／砲丸
投決勝／円盤投決勝

女子：200m決勝／800m決勝／5000m決勝／
100mH決勝／400mH決勝／円盤投決勝

▼テレビ放送予定

第1日

6月23日（金）

19:00～20:50（NHK BS1）

第2日

6月24日（土）

01:25～02:15（NHK 総合テレビ）

19:00～19:30（NHK BS1）

19:30～20:45（NHK 総合テレビ）

第3日

6月25日（日）

16:00～18:00（NHK 総合テレビ）

▼チケット情報はこちら

<http://www.jaaf.or.jp/jch/101/ticket.html>

▼問合せ先

日本陸上競技連盟事務局

TEL：03-5321-6580 FAX：03-5321-6591

（土・日祝日を除く10:00～18:00）

※大会の詳細は日本陸上競技連盟WEBサイト内、特
設ページ<http://www.jaaf.or.jp/jch/101/>で随時ア
ップします。



JAAF HOKKAIDO 一般財団法人北海道陸上競技協会

〒003-0626 札幌市白石区本通5丁目南4番11号
KJビル3号棟2階205
TEL.011-598-7407 FAX.011-598-7408
http://hokkaido-rikkyo.jp/

今年も7月9日(日)に厚別公園陸上競技場にて「第30回南部忠平記念陸上競技大会」が開催されます。1932年に開かれた第10回ロサンゼルスオリンピック大会において、三段跳で当時の世界記録を樹立し金メダルを獲得した南部忠平氏の功績を称え創設された大会です。今年第30回を迎えるこの歴史ある大会に全国各地からトップアスリートが集まります。今や日本を代表するアスリートとなった高平慎士選手(富士通)や福島千里選手(札幌陸協)もジュニア時代からこの大会に出場し、世界へと羽ばたいていきました。

北海道でトップアスリートの競技を見るのができるのはこの南部陸上のみであり、道内の有望選手においては日本のトップアスリートと同じトラック・フィールドの上で競い合うことができる大会でもあります。またトップアスリートが躍動する姿を見て、一人でも多くの子供たちが陸上競技の道に進み、そして一人でも多くのオリンピックが北海道から出ることを願ってやみません。

9月8日(金)～10日(日)に函館市千代台陸上競技場を主にJAAF公認ジュニアコーチクリニックが3日間に渡り開催されます。座学、実技講習、医学的知識など多岐にわたるカリキュラムで構成されています。他競技と比べ陸上競技は公認ジュニアコーチの数が少なく、ジュニアからの陸上競技を普及拡大していくにはまだまだ指導者が不足しています。たくさんの方々に受講して頂き資格取得をして頂きたいと思っております。

JAAF AOMORI 一般財団法人青森陸上競技協会

〒038-0021 青森市安田字近野234-7
青森総合運動公園陸上競技場内
TEL.017-766-5457 FAX.017-782-5154
http://www.jomon.ne.jp/arikkyo/

加盟団体協力団体とも役員の変更が行われ新体制で新年度の事業も順調に実施されております。

青森県記録の見直しとして、今まで青森県登録者でなければ県記録として公認していませんでしたが、他県登録者であっても本県出身の競技者が県記録を上回った記録についてはさかのぼって青森県記録として公認していく方針です。

これからの事業として6月25日には日清全国小学生大会の青森県予選大会が青森市で実施されます。7月1日～2日には全国中学生通信陸上青森県大会(青森市)・7日～9日には東北大会県予選兼国体陸上青森県選手選考会(むつ市)が予定されております。今まで実施された競技会では、気候の変動が大きく大会運営では苦勞しております。記録的には、2年生ながら奈良岡蘭選手(弘前中央高校)が女子やり投で48m00の好記録を出しております。

(文責:理事長 安田信昭)



JAAF IWATE 一般財団法人岩手陸上競技協会

〒020-0822 盛岡市茶畑2-8-27
TEL.019-621-8460 FAX.019-656-9006
http://long-distance.jp/iwate/

多くの関係者の皆様の温かい御指導・御支援、また多大な御協力いただき、昨年10月、2巡目のいわて国体を成功に収めることができました。改めて衷心より御礼を申し上げます。

大きな節目の年度を越え、今年度、岩手陸上競技協会は役員改選期を迎え、5月13日の理事会及び評議員会を終え、新体制により、本県陸上競技の益々の発展を期し、大会運営、競技力の向上及び定着、また普及育成等、今後必要に応じ事業運営の検討をし、加盟団体との連携強化とあわせて円滑な事業推進を図っていくことを全会一致で確認したところであります。

選手強化策も、選手個々への個別的なサポート等、体制の構築及び拡大と、情報共有と組織内外での方針の共通理解の形成が課題であり、強化部を中心に、関係の指導陣と選手共に、同じベクトルで取り組み、成果を上げていく必要があります。

2017年2月19日に行われた日本選手権20km競歩で3連覇を果たした高橋英輝選手(岩手大学→富士通)は、8月の世界選手権(ロンドン)代表を決め、5月20日に秋田県陸上競技場で行われた東日本実業団選手権男子5000m競歩でも、19分5秒97で3連覇を果たしました。是非とも、世界選手権での入賞、できればメダル獲得を大いに期待するところであります。

一広げよう 感動。伝えよう 感謝。一東日本大震災復興の架け橋として開催された『希望郷いわて国体 希望郷いわて大会』両大会で得られた貴重な体験・財産を活かし、皆様からいただいた多くのお力添えを支えに、実り多き年とするため着実な歩みを展開していきたいと思っております。(文責:理事長 山崎孝一)

JAAF MIYAGI 一般財団法人宮城陸上競技協会

〒981-0122 宮城郡利府町菅谷字館40-1 宮城県総合運動公園内
TEL.022-767-2194 FAX.022-767-2194
http://jaaf-miyagi.com/

第27回仙台国際ハーフマラソン大会が5月14日仙台市中心部で開催され、12,991人のランナーが、小雨に濡れた杜の都を駆け抜けました。メインのハーフマラソンコースは日本陸連公認コースで、弘進ゴムアスリートパーク仙台(仙台市陸上競技場)南側道路をスタートし、同競技場にゴールするコースです。

大会を盛り上げたのは地元富谷市出身の野口拓也選手(コニカミノルタ・宮城・東北高一休体大出)でした。男子で日本勢として第一人先頭集団に加わりスピードある外国人選手を向こうに回して自己ベストを更新の1時間2分21秒で4位でした。

今回初めて導入された「救護ランナー」で医師や看護師ら計288人が登録し、コースを走りながら体調不良者に気を配るということです。当日は雨天で熱中症患者は無く救護関係者や大会実行委員は一安心。

今回のゲストランナーは、「市民マラソンの星」谷川真理さん、ソウル、バルセロナ両五輪代表の中山竹通さん。5年連続でゲストランナーの高橋尚子さんは、スペシャルアンバサダーとしてゴール付近で選手を激励し、又、ランナーとのハイタッチで仙台を盛りあげられました。

10月には、「東北・みやぎ復興マラソン2017」が開催されます。東日本大震災から5年半、2017年秋、『被災地復興のいま』をスポーツを通じて日本や世界に伝えようと頑張っております。

(文責:理事長 大泉一雄)

事務局からのお知らせ

◆◆6月23日より大阪にて開催！第101回日本陸上競技選手権大会をスタジアムで！◆◆



今夏開催の第16回世界陸上競技選手権大会（2017 / ロンドン）の代表選手選考競技会を兼ねて開催する、第101回日本陸上競技選手権大会。今年の舞台は、大阪市、ヤンマースタジアム長居！

選手達の熱戦をぜひ、競技場でご声援をお願い致します。

大会特設サイトでは、最新情報を随時更新中です！エントリーリストから競技日程、プロモーションビデオなど、大会を楽しむことができるコンテンツが満載です。

▼第101回日本陸上競技選手権大会特設サイト
<http://www.jaaf.or.jp/jch/101/>

◆◆陸上競技ルールブック2017年度版を、4月より全国の書店、ネット書店で販売開始しました。◆◆

陸上競技関係者や愛好家のための2017年度版ルールブックの発売を開始しました。

修正のあった国際及び日本国内陸上競技ルールを反映し、すべてのルールのほか競技場の仕様、全国の公認陸上競技場一覧などを掲載しているルールブック。

お近くの書店にない場合は、電話またはホームページからもご購入いただけます。
お電話でのご注文の場合：0120-911-410（ベースボール・マガジン社 受注センター）
※受付時間 月曜日～金曜日 10：00～12：00、13：00～16：00（祝祭日を除く）
ホームページからご注文の場合：ベースボール・マガジン社のウェブサイトへ。
<http://bookcart.sportsclick.jp>



陸連時報編集委員

◇編集委員

- 横川 浩（陸連会長）
- 友永 義治（陸連副会長）
- 八木 雅夫（陸連副会長）
- 尾縣 貢（陸連専務理事）
- 伊東 浩司（陸連強化委員長）
- 風間 明（陸連事務局長）
- 牧野 豊（陸上競技マガジン編集長）

◇時報編集室責任者

- 大嶋 康弘
- ◇時報編集担当
- 繁田 進
- 石塚 浩
- 青木 和浩
- 宮田 宏
- 廣瀬 静香

陸連時報編集室

〒163-0717
東京都新宿区西新宿2-7-1
小田急第一生命ビル17階
公益財団法人日本陸上競技連盟 内
TEL 03-5321-6580
FAX 03-5321-6591
WEBサイト <http://www.jaaf.or.jp/>
公式動画サイト <http://japanathletics.tv/>